京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第一卷　第二號

論說

◉大藏省證券ヲ論ズ　法學博士　小川鄉太郎
◉夫婦婚姻年齡ノ組合セ　教授　財部靜治
◉でゞゐっど・ひゆーむノ經濟學說(二)　法學博士　福田德三

雜錄

◉下層金融ト國民性　法學博士　神戸正雄
◉英吉利ノ農政問題(二)　助教授　河田嗣郎
◉米ノ豐凶ト米價　講師　高田保馬
◉まるさす人口論(初版以下)各版ノ差異　法學博士　河上肇

雜報

◉佛國ニ於ケル人口趨勢ト之ニ對スルノ政策　法學博士　神戸正雄
◉對露貿易伸張ノ餘地　助教授　河田嗣郎
◉電氣事業ノ國家獨占　法學博士　神戸正雄
◉職業ノ分岐併合ノ一例　法學士　本庄榮治郎
◉穗積博士還曆祝賀會　法學博士　小川鄉太郎
◉れきしす教授逝ク　教授　財部靜治
◉帝國人口統計ノ描畫圖　教授　財部靜治

大正四年十一月三十日　五版

禁轉載

職業ノ分岐併合ノ一例

（西陣ノ練糸業ニ就テ）

法學士　本庄榮治郎

一

往古經濟ノ進歩セサリシ時代ニアリテハ一家內ノ需要品ハ多クハ之ヲ當該家內ニオイテ生產シ、敢テ他家他門ノ經濟ト接觸シ之レト交易ヲナスコト未タ頻繁ナラサリシ也。然ルニ時代ノ進歩ニ伴ヒ經濟ノ發達ニ應シ、次第ニ農業ト工業トノ分立ヲ生シ、更ニ商業ノ分岐トナリ、所謂職業分化ノ現象ヲ見ルニ至レリ。而シテ一職業內ニアリテモ又自ラソノ長技トスル處ノモノヲ專ラニスルニ及ンテ、或ハ縱斷的ニ專業的分業トナリ、或ハ橫斷的ニ生產行程上ノ分業ヲ生セリ。カクノ如キ職業ノ分化ハ從來屢唱ヘラルル所ニシテソノ實例亦乏シカラサル也。最近余ノ蒐集シ得タル西陣練糸屋ニ關スル天保安政年間ノ文書ニ於テモ亦コノ職業分岐ノ一例ヲ示セル

モノアリ。乞ヲ少シク之ヲ述ヘン。

二

現時ノ西陣ニアリテハ職業上ノ分化顯ル細密トナリ、機業ノ準備ニ關スル業務ガ多クハ獨立セル補助業トシテ存在シ、關東某機業地ニ於テ見ルカ如ク機業家カ色染精練等ノ作業ヲ自ラ兼營スルモノ殆ント之レナキ也。然レトモ我カ西陣ニ於テモ元祿以前ニアリテハ糸練ノ作業ハ機業家自ラカ行ヒシコト次ノ文書ニヨリテ明カ也

即チ曰ク

『西陣高機入組御仲ケ間ニテ御織立被成候生糸煉方等之儀御仲ケ間ニ而煉方被座候義者發端之儀ニ御座候處元祿年中ノ比御仲ケ間之内ヨリ煉物仕覺候者相分レ煉物職仕候義ニ付而者其御仲ケ間八組様ヲ御願申上糸煉爲致貰候義ニ付第一之御得意ニ御座候而其後追々西陣一體織屋之向丹糸組物屋且練糸練絹ヲ商賣ニ相用ヒ候先々共私共方得意先ニ相願候義ニ御座候處』云々。(安政四年五月文書)

カクノ如ク練屋ハ織屋ヨリ分立シタルモノナルガ、天保ノ頃ニ至リ彼等ハ一ノ株仲間ヲ組織センコトヲ請ヒシモ、偶々同十二年ノ株仲間解廢令アリシヨリソノ實現ヲ見ルニ至ラサリキ。

同八年二月練屋十四軒ヨリ高機仲間ヘ差出シタル約定書ニ於テハ『其御仲間ヨリ練物職被成候節ハ加入銀不申請相加ヘ可申候事』トイヘルガ、之ハ必スシモ當時尙織屋ニ於テ練物作業ヲ兼營シソノ職人等ノ獨立シテ練屋トナル者多カリシカ爲メニハアラスシテ、寧ロ安政四年ノ文書ニ『私共職筋之者共義前段巻申上候通發端者其御仲間之内ヨリ相分レ候義ニ御座候故則天保八酉年差入候約定書ニ其御仲間ヨリ煉物職御始メ被成候節加入銀杯者不申受義者約定書之第一ニ相認有之候義ニ御座候』云々。

トイヘル如ク練屋ト織屋トノ成立關係ニ基クモノナルヘク、元祿以降既ニ百三十年以上ヲ經過シ、又株仲間制度ヲ立テテ同業者ノ取締ニ任セント計畫セシ程ナレバ、練屋ハ既ニ一個獨立ノ分業トシテ認メラレ、且ツ十分ナル技能ヲ有セシナルヘク、織屋ハ自ラ之ヲ兼營スルヨリモ練屋ヲシテ行ハシムル方却テ有利ナリシナラン。

両者ノ成立關係ハ前述ノ如クナルカ故ニ主從的觀念ノ強キ當時ニアリテハ、両者ハ恰モ宗支ノ關係ヲ有スルカ如ク取扱ハレ織物ハ練屋ニ對シテ顯ル優勢ナル地歩ヲ占メシモノノ如シ。例

ヘハ『尤練貨之義ハ御仲ケ問御定通ニ而格別人念可仕候間』云々（天保四年二月文書）トイヒ、又『何事モ等閑一ケ度ニ而モ仕候ヘハ練物職其御八組樣エ御戻シ可申候』（天保八年正月文書）トイヘルカ如キ、又或ハ次ニ述フルカ如ク他機業地ト對抗スル上ニ於テ技術ノ移植ヲ防止シ練糸屋ニ對シテモ西陣織屋ノ不利益トナルカ如キ行爲ナカラシメントセシカ如キ、何レモソノ消息ノ一端ヲ示セルモノナル可シ。

三

八代將軍吉宗ハ殖產興業ノ途ニ力ヲ致シ所謂國產奬勵ノ策ニ出テシカハ、茲ニ勃然トシテ產業興リ、關東奥羽諸國ノ村里亦養蠶機織ノコトニ勉ムルニ至レリ。カクテ各地機業ノ勃興ニヨリテ西陣ハ一ノ勁敵ヲ見出スコトトナリ、最早從前ノ如キ獨占的地位ヲ擅ニスルヲ得サルニ至レリ。而シテコレニ對抗スルカ爲メ種々ノ方法ヲ廻ラセシガ之レヲ概括セハ製品、原料、技術ノ三方面ニ分ツコトヲ得ヘシ。先ツ製品關係ノ上ヨリ見ルニ各地製品ノ中ニアリテ桐生ノ紋織物丹後ノ縮緬ハソノ影響スル所、特ニ大ナリシモノノ如ク之レニ處スルノ方策トシテ西陣織物ハ一方ニ於テ幕府ニ乞ヒテ寛保四年（卽チ延享元年）春以來ノ桐生ニオケル新規紋織營業ヲ停止シ、又丹後縮緬年額三萬六千反、桐生紗綾九千反ヲ限リソレ以上ヲ京都ニ搬入スルコトヲ得サラシメシガ、コノ輸入制限策亦行ノ困難ナリシコトハ明和天保年中糸高直一件記錄ヲ見ルモ明カ也。

次ニ各地機業ノ創設發展ハ原料關係ノ上ニ於テ西陣ニ大ナル壓迫ヲ加ヘタリ。蓋德川ノ初期ニアリテハ生糸ハ主トシテ支那葡萄諸船ヨリノ輸入ニ俟チシト雖、其後內地蠶業ノ途開ケ延享明和ノ頃ニアリテハ主トシテ和糸ヲ使用セシカ如シ。然ルニソノ產額未タ必スシモ大ナラス又交通ノ便頗ル不備ナリシヲ以テ各地方ニ新機業ヲ發生スルトキハコノ方面ニ生糸ヲ吸收セラルルコト多ク、ヒイテ京都ニ向ケラルヽ生糸ノ量ヲ減シ糸價忽チ奔騰シテ西陣機業家ハ大ナル影響ヲ蒙ラサルヲ得サリキ。殊ニ從來京都ニ對

スル生糸供給地タリシ地方ニ於テ機業勃興シ爲ニ生糸ヲ輸入セス却テ製織品ヲ輸入スルニ於テハ彼等ハ二重ノ壓迫ヲ蒙レルモノトイハサルヲ得ス。サレハ西陣ノ機業家ハ原料關係ノ上ニ就テモ慶喜府ニ請願シテ糸ノ買占ソノ他ノ不正行爲ヲ取締ランコトヲ以テセリ。（明和天保年中糸高直一件記錄）

更ニ他ノ機業地ノ發達ニ對抗スル爲メノ第三ノ方法トシテハ技術ノ移植ヲ防止センコトニ努メタリ。コレヨリ前、西陣ノ中堅タル高機七組ニアリテハ延享二年一ノ仲間ヲ組織シ、寶暦十三年之ヲ八組トシ、明和四年仲間定法ヲ改正シテソノ取締ヲ周密ニセシガ、コレ等ノ規程ニ於テハ織手糸操等ノ他國ヘ赴キタル者ハソノ後歸京スルモ之ヲ雇傭スヘカラストシ、又明和年間ノ文書ニヨレハ當時諸侯ノ御用ト稱シテ西陣織屋下職人等ヲ他國ヘ羅致セントスルモノアルヲ以テ若シ諸侯ニ於テソノ用アラハ直接西陣機業家ニ對シソノ旨ヲ申込マレタキコトヲ乞ヒ、天明大火ノ後職工徒弟相ツイテ逃亡四散スルヤ、西陣高機織屋奉公人取究所ヲ設置シテソノ取締ニ任シタルカ如キ、何レモソノ例ナルガ、練屋ニ對シテモ他地方ヨリノ注文ヲ受クルコトヲ得サラシメタリ。即チ曰ク

一、田舍ヨリ之練物類一切堅仕間敷候事。

但シ在田舍方ヨリ糸練ニ參リ候ハハ預リ置早速貴御仲ケ間ニ通達可仕候。

一、其御仲ケ間之御方樣ノ内ニモ機敷ト不相應之糸練ニ參リ候ハハ早速御屆ケ可申候。且又其御職筋ニ紛敷練物等參リ候ハハ是又不隱置早速可申出候。勿論素人方ヨリノ糸練堅仕申間敷候事。（天保八年二月及ヒ安政四年五月文書）

四

以上述フル所ノ如ク西陣ノ練糸屋ナルモノハ元來織屋ヨリ分岐獨立シタルモノ也。而シテコノコトハヒイテ兩者ノ取引關係ニモ影響ヲ及ボセシモノナルガ、現今ニ於テハ練糸業ナルモノハ更ニ他ノ職業ト併合スルニ至レリ。抑機業家ハ製織ニ必要ナル原料ヲ買受ケ之ヲ撚製セシメタル後、之ヲ練上ケシメ更ニ之ヲ色染セシムルモノニシテ色染ヲナス以前ニ於テ必ス糸練ノ工程ヲ經ルヲ通常トス。而シテコノ工程ヲ業トスルモノハ即チ練糸業者ナリ。從來糸練及ヒ糸染

ハ獨立セル二個ノ職業トシテ存續シタルモノナレトモ、現時ニアリテハ染屋ハ殆トスヘテ練糸ヲ兼營シ練專業ノ者ハ指ヲ屈スルニ足ラサル程ノ少數トナリ了レリ。是レ蓋練染ノ二工程カ頗ル近接セル設備及ヒ作業ヲナシ技術上之ヲ併合スルニ適セルノミナラス、之ヲ機業家ノ立場ヨリ見ルモ練染ノ兼營行ハルルトキハ練屋及ヒ染屋ノ二者ヲ經由スルノ必要ナク從テ加工期間ノ短縮ト手數ノ省略トヲ期シ得ヘキノ利アルニ由ル也。

由是觀此、西陣ノ練糸業ナルモノハ職業分岐ノ一例タルノミナラス、同時ニ職業併合ノ一例トシテモ之ヲ考フルコトヲ得ヘキモノ也。